

ブッダゴーサの著作に至るパーリ文献の五位七十五法対応語

河崎豊

バウッタコーシャ・プロジェクトにおいて、大阪大学の研究班（研究代表：榎本文雄）は「初期仏教関連用語」という課題のもとに調査を続け、その成果を2014年に山喜房佛書林より『ブッダゴーサの著作に至るパーリ文献の五位七十五法対応語』（以下『本書』）として上梓した。同内容のものは、バウッタコーシャ・プロジェクトのウェブサイトで公開されている。また研究の中間報告は、本プロジェクトのニューズレター（1・2・3・5号）で報告済みであり、これらもそれぞれ同ウェブサイトで公開されている。本発表は『本書』とニューズレターで提示した論点を基礎とし、それらでは触れなかった若干の補足を交えて、以下の4点を報告する：

- (1) 大阪大学の研究班が扱った範囲について、それを課題とするに至った経緯を説明する。その際、初期段階における予備的な調査と、その過程で行き当たったいくつかの問題点について触れることもあろう。
- (2) 『本書』における調査文献の範囲と、『本書』が「定義的用例」とみなす基準を説明する。
- (3) 以上二点を踏まえ、『本書』が扱った若干の術語からサンプルを提示し議論する。具体的には(3-1)『俱舍論』における定義と若干の相違を示す例として *māyā* 「誑」と *sāṭheyya* 「諂」を、(3-2) のちの仏教における意味の展開が確認しがたい例として *adhimokkha* 「勝解」を、(3-3) ヴェーダ文献以来の中核的な意味が三蔵に保存されていることを再発見した例として *paññā* 「慧」を取り上げる予定である。
- (4) 仏教術語の意味を確定する際に必要と考える作業案を提示した後、『本書』が残した課題と将来的な展望を議論して、当研究班が行った作業の総括とする。